

鈴木貴博 『仕事消滅 AIの時代を生き抜くために、いま私たちにできること』

講談社+α新書 2017年

グループ研究の総括

1. 世界規模で現在の仕事の半分が自動化されるのは2055年と予測される。✓
2. ロボットの数が増えれば間には足りないため、主にGDPが高い先進国で使われることが予想される。
3. ロボットよりもAIのほうが先に発達するため、特に技能や才能を必要としない単純労働よりも早く、頭脳を使った仕事が消滅する。✓
4. ドライバーやマシンオペレーターや裁判官など多種多様な仕事が無くなると言われている。
5. 人類が最後までロボットやAIに勝てる能力は手と指なのでスーパーの店員や食品加工工場の従業員の仕事などはすぐには無くならない。✓
6. 失業者が10%を超えたらどんな政権でも維持するのは難しく、仕事消滅に対して必ず失業対策が行われるため、仮に30%の仕事が消滅しても失業者が30%になることはない。
7. 今の社会のルールに今まで以上のAIやロボットが登場して仕事が無くなると、少なくとも人類の半分が生活保護手当を受ける貧困層となってしまう。
8. AIやロボットが発達したとしても、富の再分配がきちんと出来れば人類に不幸な未来は訪れないと考えられているが、富裕層から富を奪うのは難しい。
9. 今後ロボットによるテロや多様な犯罪リスクが高まることが予測されるため、それらに対する対策を考える必要がある。
10. 働かなくてよくなった人類は、かつて奴隷に仕事を担わせたローマ帝国時代のローマ市民のように完全に労働が機械に移り変われば、楽しく快適な人生を送れるようになるが、仕事が無くなって生きる目的を失う人も出てくる。

評価・見解

近い将来今よりも多くのロボットやAIが人間の代わりに仕事をするようになると、仕事の大量消滅がおき失業者がたくさん出ると考えられており、現在の経済ルールのままだと多くの人間はお金を稼ぐ手段を失ってしまい貧しくなっていく。そういった中でワークシェアという一人当たりの労働時間を制限することによって仕事の分配をする対策があるが、それでは貧しい人の数を多くすることによって一人分の貧しさを軽減させることしかできないため他の対策案を考える必要があると思う。

そしてAIやロボットによる仕事の代替が行われるのはまだまだ先だと楽観視している人が多いと個人的に感じていて、いざ仕事の大量消滅が実際におきてしまってから動き出すのでは手遅れなので、今のうちからAIやロボットが発達しても貧困者が出来るだけ多くならないように対策や経済のルールを考えなければいけないと思った。